

論文要約

「日系漢字新聞『盛京時報』研究(1906-1932)」 徐璐

本論文は、日系漢字新聞『盛京時報』の新聞史研究であり、1906年から1932年までの時期に重点を置き、同紙の創刊、発展、紛争、新聞人について考察するものである。このように、一つの代表紙の成長史をたどることで、従来の日系新聞の歴史に対する俯瞰的概観を修正し、日系漢字新聞をめぐる日中間の交流・紛争・人の動きの実態を浮かび上げ、日本人の在華新聞事業がなぜ成功をおさめたかという大きな課題に接近することを目指している。

序章では、まず日系漢字新聞の研究背景を提示し、そのなかに『盛京時報』を位置づけたうえで、日系漢字新聞の研究史、とりわけ『盛京時報』に関する先行研究を整理・紹介する。従来の日系漢字新聞には、個別研究より通史的な概説が多いこと、これまでの『盛京時報』に関する研究には、「対中宣伝」を前提にした紙面分析が先行し、新聞史研究の原点である同紙の発展と同社の成長が完全に見落とされていることを指摘したうえで、本論文の構造と内容を予告する。

第一章では、『盛京時報』の創刊経緯とその前史を辿り、同紙の政治的性格、発展と普及の経緯と読者層を考える。第一節では、同紙の創刊・命名の経緯を辿る。第二節では、外務省から同紙へ下付した補助金の明細を追うことで、同紙の政治的性格を明らかにする。第三節では、当時の奉天新聞界に目を向け、中国人経営による新聞の群像を提示する。第四節では、各時期における『盛京時報』の発行規模と販路を明らかにし、発展・普及の経緯を可能な限り確認する。第五節では、リテラシーと経済状況という視点から、『盛京時報』の読者層にアプローチし、同紙の読者像を構築する。これによって、『盛京時報』の創刊、発行、販売と購読の実態に迫り、満洲における日系漢字新聞の発展史の一端を示すほか、あわせて読者研究の一つの進路を切りひらく。

第二章では、『盛京時報』にまつわる筆戦事件に着目し、1925年に起きた五・三〇事件をめぐる同紙と『東三省民報』の論争について考察する。主に、『盛京時報』と『東三省民報』をはじめ、『泰東日報』、『関東報』、『吉長日報』や『濱江時報』などの新聞に加え、外務省と満鉄が行なった新聞調査資料や遼寧省檔案館所蔵の奉天軍閥檔案などの一次資

料を使う。第一節では、『盛京時報』をめぐるいくつかの論争事件について簡単に追い、そこに見られる共通点を提示する。第二節では、1925年に起こった『東三省民報』と『盛京時報』の論争についてその背景と経緯を考察する。第三節では、同論争をきっかけに東三省全域にわたっておきた排斥運動の展開とその影響を考える。これによって、『盛京時報』の頓挫と再起を考え、日系漢字新聞の発展と挫折という大きな課題について考える。

第三章では、1927年に起こった『盛京時報』の筆禍事件を考察することで、近代日本の対中宣伝と紛争という課題を考える。主に、民国時期の中国側の新聞、遼寧省檔案館所蔵の奉系軍閥檔案、さらに日本外務省・満鉄の調査資料や外交文書・電報などの資料を使う。第一節では、中国新聞史上の様々な筆禍事件の中に同事件を位置付ける。第二節では、1927年から1928年に亘る筆禍事件の全貌を可能な限り明らかにする。第三節では、同筆禍事件をめぐる日中の交渉の実態と1927年の東方会議後の「満蒙懸案」交渉において同紙が演じた役割を考察する。これによって日本の対中宣伝の背景のもとに中国官憲、日本官憲、中国民衆という三者の間に立つ同紙に課せられた多面的な使命についても解明を試みる。

第四章では、新聞人の手記、随筆集や回顧録などの二次資料に加え、遺族への取材なども用いて、満洲に生きた盛京時報社の在華新聞人について考察する。第一節では、清末より日本人が中国に渡航し、漢字新聞を創刊した背景を概観したうえで、盛京時報社に目を向け、会社の組織構成、社員の入社経緯と略歴などを可能な限り考察し、在華新聞人の多様な生き様とそこに見られる共通点を提示する。第二節では、代表的な新聞記者として、盛京時報社の看板、「対中宣伝の尖兵」とみなされてきた主筆の菊池貞二、一方的な対中宣伝に異を唱え、のちに邦字新聞を創業して関東軍と対立した佐藤善雄、そして同社の終焉を見届け、戦後に日中友好の代表者として三回訪中した尾形順次の三名を取り上げ、それぞれの数奇な人生をたどる。このように在華新聞人に焦点を当てることにより、従来一括りに考えられてきた在華新聞人の複雑性、多様性を示すことを試みる。

終章では、各章で行った議論を振り返ったうえで、あらためて対中宣伝の使命を帯びたのに、満洲新聞界で人気を博した『盛京時報』の成功の理由について考える。